

[翻訳]

P. B. シェリー 詩選 (2)

P.B.シェリー 作
加藤 芳子 訳

「海の夢」

それは嵐の恐怖だ 帆の怒りが
烈しい強風の中のリボンのように はためている。
蒸気の激しい夜空から かすかな雨が降ってくる。
天から洪水のように 雷が放たれると
彼女は竜巻の黒い幹が 回転し 5
まるで天が崩れ落ちるように 曲がるのを見る。
それを彼らは、まるで大洋が彼らの下から沈んだかのごとく
彼らの恐ろしい塊により支えているように見えた。
彼らは地震のような音をたてて
海の底の墓の中へと通過していく。すると波と雷は 1 0
周りを鎮めて 風をこだまに残して行ってしまう。
船は 嵐の低く後を引く ちぎれ雲の中で
激しく揺すられて 雷雲の裾に見えなくなった。
今や裂かれた波に なぎ倒され
海の深淵に沈んでいく すると恐ろしい静寂の 1 5
深みが突風にも動じない 海水の谷の壁と
難破船の曇った鏡は 周りでチラリと光った。
大波は 星の混沌のように 死の炎の怒号のように
炎を出している 鉄の渦巻のように
輝きと恐怖で 黒い船を包み 2 0

あるいは脈から上る 淡い炎の硫黄の火花のように
 その上に源でとうとうと噴出する 沢山の尖塔の形をした
 ピラミッドのような大波は 塩水の白い波頭を立て
 海の床から天をも貫くように
 稲光の天空の中で 気紛れに光る。 2 5

この大型船は裂けているように見える。木から枝をはぎ取った
 竜巻の突風が通過する前に 地震がその根を
 木っ端微塵にする時の 木のように割れる。
 天から降っている激しい雷光は そのマストを破壊してしまい
 それは真っ黒焦げに裂けている。その裂け目は倒壊を 3 0
 吸っている。 その重く沈んだ廃船は
 生きている海の上で 生命のない巨体を回転させる。
 まるで周りの沈没をたたこうと渴望している
 粘土の上の死体のように。その間その砦からは
 下の海から 一枚の甲板が飛び出し 3 5
 それは雪解けの微風が 砂漠の湖の上に
 吹く時の氷のように裂けていく！他の甲板に座っているのは誰だ？
 フォアマストのあたりで まるで裂け目の中の死体のように
 折り重なって横たわっているのは 乗員全部なのか？
 海面が盛り上がると恐怖に苦しみ つながれている鎖を 4 0
 引きちぎろうとしてるのは 二匹のトラか
 (二匹をおとなしくしていた物が 今度は大胆にしている)
 彼らは並んでうずくまり 波に震える厚板に
 その爪をたてさせられている—
 残るはそれだけか？九週間もこの背の高い船は 4 5
 風のない広い大海原の上に横たわっていた。
 そこでは死をも射るような陽射しが 正午には影も作らず
 月の光にさえ 火があるように思えた。
 やがて鉛色の霧が その息が迅速なペストとなる

- 海から集まってきた。次に冷たい眠りが 5 0
 この込み入った船の上に 忍び寄ってきた。
 まるで びっしりと実った麦畑の穂に広がる 焼き枯れ病のように
 船乗りはハンモックを棺にして 怖がっていた。
- 海は死体を飲み込むと 自分の上でも周りでも口を閉じた。 5 5
 するとフカヤツノザメが 死体の^{きょうかたびら}経帷子をほどこき
 神から 彼らの荒野たる海に降ってきた このマンナを
 ユダヤ人のように思う存分食べた。次々と一人また一人と
 船乗りは死んでいった。この日の夕方
- 嵐が雲を従えて 集まってきたが 6 0
 七人は生き残っていた。六人は雷が打ちのめし
 彼らは「時」が死体防腐処理する人の 軽蔑の言葉を書いた
 ミイラのように真っ黒になって 横たわっている。
- 七人目の船乗りは ^{かしわ}榎の木の破片が胸と背中を貫通し
 難船の上の残骸として 嵐にさらされてぶら下っていた。 6 5
 もう誰もいないのか？ 舵の所には 星が透けて見える髪を
 ほどこきながら 天より美しい女が座っている。舵は
 夕日と共に 地上と海上で沈んでいく。
- 彼女は組んだひざの上に 美しい子供を抱きしめている。
 彼は雷を見て笑っている。 空気と海の混じった雷を 7 0
 希望と驚異の念で嘲るかと思うと 二匹のトラに起きて
 近くに来るよう手招きをしている。 彼は恐怖の輝きが
 流れ星より輝いている トラの眼とでも 遊ぶだろう。
- その胸の鼓動は高なり 喜びの心の炎は その目を輝かせた。 7 5
 一方母親は輝きがない。「いい子だから 笑わないでよくお休み
 そしたらどんな恐ろしい苦痛が待っていても ^{だま}騙されるわよ
 それは私と子供を 引き離すに違いないのよ
 夢を見て お眠りなさい！あなたの揺り^{なご}籠でベッドだった
 私のこの青白い胸は 揺り籠になってないかしら？」 8 0

それは恐怖にドキンドキと打っている！ ああ
 生命とは何なの 死とは何なの 私達は何なの
 船が沈んだら私達は もうこの世にはいないの？
 何と！あなたをもう見れない あなたに触れないなんて？
 死後の世界に行くって その前は私達は何だったの？ 8 5
 この可愛い手に触れないですって？ その眼が見えなくなるですって？
 この唇も 髪も 今している作り笑いも
 来る日も来る日も長い間 私の子と呼んだ
 この優しい魂も？でもそれは今 虹のように消えてしまい
 私も降った雨のように消えるの？」見よ！船は 9 0
 安定しているのにぐうっと倒れる。風下側の左舷が水にもぐる。
 トラは塩水が毛や耳や四肢や目に 一インチ一インチと
 ゆっくり忍び寄るのを感じると 飛び起き
 恐怖に硬直している。大声で長い枯れた吠え声^{まぐわ}がすぐに
 二匹の生命の中心から 恐ろしいほどに炸裂すると 9 5
 山のような波の谷底へと 運び去られて
 まるで雷のように 岩山から洞窟へと激しく打ちつける
 雨の音と混じり 反響しながら ハリケーンの力によって
 どんどん急いで 沈んでいった。
 ハリケーンは
 西の方からやってきて 1 0 0
 東の空にいる太陽の門の道を 通っていった。
 嵐の流れを斜めに分けながら。まるで矢のようなへビが
 ゾウの姿を追いかけて 荒野の藪から
 いきなり 飛び出してくるように。
 ウのようにうなり声をあげる突風が 大洋と天の間に戻り 1 0 5
 やがてそれは世界の縁の 雲の所にやってきた。
 それは風に基礎をおき 天にまで巻き上がった。
 まるで柱や壁が 嵐のドームを囲み支えているように

嵐はそれらを二つに引き裂いた。まるで洪水が 1 1 0
 山の岩山の境界を 分離していくように
 そして濃い雲は 多くの廃墟やスレートの屋根の中に
 まるで地震が過ぎる前の 神殿の石が
 その崩壊時のチリのように 竜巻の上に投げられるように
 それらは急流の泡のように 飛び散った。そして 1 1 5
 峡谷を通して風がどっと 吹いて通った所では
 晴れた朝の空気から妨げるものがない 強烈で金色で透明な
 朝日の光と空気の軍団として 光が射し込み
 一つの門で 彼らは出会うが 互いに貫きあう。 1 2 0
 そして嵐の中のあの砕け波は 広がって去っていき
 雲の洞窟は 朝日に引き裂かれ
 烈しい嵐は 翼も疲れておさまり
 うねる海の動きやつぶやき そして長い
 鏡のようなうねり 波にあやされ 1 2 5
 見上げれば空は 燦然と晴れわたっているが
 嵐の残骸を見れば恐ろしく 日の出の光の中で
 金色の雲のように 消えていく。山のような波は
 青い空の深い静寂が 天上に広がり
 愛の存在により鎮められた 情熱のように 1 3 0
 澄んだ表面の下で それが穏やかな影響に
 震えながらゆっくりと 滑るように過ぎていくのを
 潮を広げながら アンデス山脈からアトラス山脈にまで
 山や島の周りを 海鳥や難破船の周りを 天の紺碧の微笑を
 敷き詰めて 海の広い世界は振動している。あの船は 1 3 5
 どこへ行ったのか？船が浮いている波の端で
 一匹のトラが恐ろしく怯えて 海へびと絡み合っている。
 その戦いの泡としぶきは 澄んだ空気を虹の色で染めている。
 容積の莫大な無限の力に砕かれた へびの堅固無比の

ツボや硬い骨のガタガタいう音を 染めた。 140

そしてトラの掴みが 怒りと力と努力に膨れていた
 ヘビの血管を傷つけた所で噴出して雨と噴き出る
 熱い血のブーンという音は その堅い歯が
 希薄な風と穏やかな波を 雷のような音に打ち砕く。 145

何か忌わしいエンジンのような回転運動とはね返す音
 トラの唸り声とヘビのシューという音は それぞれ唇脚類の
 節足動物のような音をたてて 滑らかな大洋の
 流れの上を 素早く這っていく。この騒動の近くでは
 青いフカが 青い海の中に
 勝者のヒレの翼をつけた墓として 浮いている。 150

トラは 兄弟の運命から 道を見つけて
 絶望のスピードで 自らの道へ突進している。見よ！
 ボートが近づいてくる。十二人の漕ぎ手が衝動の思いに
 駆られて 鋭い竜骨の上に 塩水の泡を駆り立てる。
 船尾では 三人の狙撃兵が 照準を合わせている。
 熱い弾丸がトラの胸に飛んでいき 波を 155

逃亡と死へと運んでいく。 一片だけが
 小さくなり沈んでいく。もうほとんど沈んでしまった。
 それは船の残骸を 海の中から外をうかがっている。
 左手で彼女はそれを烈しく掴み 160

右手で可愛い子供を支えている。死と恐怖 愛と美は
 この状況の中では混じっている。それは海上でも
 恐怖の心の熱情で 彼女の狂気じみた目と輝く手と頭は
 光の流れ星のように震え燃えている。彼女の子供は 165

まだ笑い ふざけてつぶやいている。嵐の前では
 偽りの海も笑っていた。姉と弟のように
 子供と大洋はいつまでも互いに笑いあっている。
 一方....

[ピサにて 1820年4月]

「空に寄せるオード」

霊たちのコーラス

第一の霊

雲一つない夜の 宮殿の屋根 [夜空] よ!

今も昔も

永遠の時の 現在と過去の

深く果てしなく 広大な

金色の光の 楽園よ!

5

謁見の間よ

来たるべき 幕と時代を

常におおう 天蓋よ!

神々しい形あるものが 汝の中には生きている

10

例えば 地球や その全ての仲間たち

生きている天体たち そこは絶えず

汝の深い割れ目や荒地で 一杯で

そしてゆっくり傾斜していく 緑の世界や

きらめく髪をなびかせる 素早い流れ星

15

そしてこの上なく冷たく光る 氷のような月たち

そして夜を超えて 力強い太陽たち

この上なく強い光のアトムたちで 一杯だ

汝の名前さえ 神のようだ

天よ なぜなら汝は

20

あの力の住処だから それは鏡で
そこに人は その性質を見る
世代が過ぎても
ひざについて 汝を崇める
彼らの生き残らぬ神々と彼らは
川のように 流れさってしまう
汝だけは 永遠に残る

2 5

第2の霊

汝は心の第一の 部屋にすぎない
その部屋には 鍾乳石に照らされた
洞窟の中の 弱々しい昆虫のように
うら若い空想が 這い這いしている
しかし 新たな喜びの世界が
汝の最高の栄光を 作るだろう
その墓の玄関は
夢の影から ちらりと光って見える
おぼろげな昼間の微光にしか 見えないのだ！

3 0

3 5

第3の霊

平和よ！深淵は 原子から生まれ
あなたの推測に対する 軽蔑に包まれている！
天とは何か？ そしてその短時間の広がり
を受け継いでいる汝たちは 何者なのか？
太陽とか天体とは 何なのか？
それらは 汝らがその一部にすぎないものの
あの霊の本能によって 逃げるのだ

4 0

自然の力強い心臓が か細い血管を
追いたてる [血の] しづくよ! 去れ!

4 5

天とは何か? 露のある地球は
その若葉が 想像だにできない世界で
目覚めさせる 何かの目を持つ草花を
朝になると 新たに一杯にする
動揺しない星が群がっている 太陽たちは
測りしれない 大きな軌道にあり
あのはかなく消えていく天体の中に 引き寄せられていく
そこにはおびただしい数の星が
集まっては震え 光り 消えていく

5 0

[フィレンツェにて 1819年12月]

「[天に寄せるオード] のキャンセルされた断片」
[1903年 Examination などに C.D.Locock が出版]

[私の魂を維持している] この[生きている]身体は
[厳しい管理のもと沈んで] いく
歌という ランプのない深淵を 下へ下へと
私は引かれて 追われていく—

国民が声高に 叫び声を上げると
雲からワシのように...

5

...

夜が... の時...

...

猜疑と古い目つきを 見よ—

無視を見よ　そして偽善を檻に入れよ... 10

「勸告」

カメレオンは光と　空気を食べて生きている
詩人の食べ物　愛と名誉だ
もしこの広い　苦勞の世界で
詩人がカメレオンのように苦勞なく
それを見つけれさえすれば 5
詩人はカメレオンが　光を変えるように
自分の色を　永遠に変えるだろうか
一日に二十回も　光を一つ一つの光線に
合わせるように？

詩人は　この冷たい地球上で 10
カメレオンのように　生れた最初の時から
海底の洞窟に　隠れている
光がある所では　カメレオンは色を変える！
愛がない所では　詩人は変わる 15
名誉とは　愛が変装したもの　もし
どちらも見つけなければ　詩人が
変化するからといって　奇妙だと思わないでくれ

だが　富や権力で　あえて汚さないでくれ
詩人の自由で　神々しい心を 20
もし明るいカメレオンが　光と風以外の
どんな食べ物も　むさぼり食うとしても
カメレオンはその兄弟のトカゲと同じように
すぐに世俗的になるだろう

もっと明るい星の 子供たちよ 25
月の上から来る 霊たちよ
おお 恩恵など 拒否せよ！

[ピサにて 1820年4月]

「雲」

I

私は海や川から 乾いた草花に
新鮮な雨を もたらす
私は木の葉に 軽い影をもたらす
真昼の夢に まどろむ頃に
私の翼からは 露が振り落とされ 5
可愛いツボミを 次々 目覚めさせる
母の胸であやされ 眠る頃
母が太陽の周りで 踊る頃
私は烈しく打ちつける 雹ひょうの打撃を統御し
下界の緑の野を 真っ白にする 10
それから私は そこを雨で溶かし
雷を着て通過する時は 笑う

II

私は下界の山の上に 雪を振りかける
すると山のマツの大木は 怯えてうめき声を上げる
そして私が突風に抱かれて 眠る間 15
一晩で 私の枕は 真っ白になる

私の空の東屋の塔の上に 尊大にも
 雷光は 私の舵手としてすわり
 下界の洞窟には 雷鳴が足枷をされている
 それは怒るともがき 吠える 2 0
 地上や大洋の上を ゆっくりと
 この舵手は 私を導いていく
 紫色の海の 深みの中を動く
 あの精霊 [イスラム伝説] の愛に 誘惑されて
 小川や崖や 丘の上を 2 5
 湖や 平野の上を
 山の下 川の下でも 彼が夢見る所はどこでも
 彼が愛する霊は とどまる
 そして彼が雨に 溶けている間
 私は天の青い微笑の中で 日向ぼっこする 3 0

III

紅の夜明けは 流れ星の目をして
 燃える羽根を 広げ
 私の帆走する千切れ雲の背で 飛び跳ねる
 すると明けの明星 [金星] は 輝きを消す
 山の崖の 鋭い角の上で 3 5
 地震がグラグラ 揺らすように
 ワシはその金色の翼の 光の中に
 一瞬 輝いて 座るかもしれない
 そして下界の光る海から 日没が
 休息と愛の 熱情を吸う時 4 0
 夕暮れの真紅の 棺にかける布は
 上空の天の深みから 落ちるかもしれない

翼をたたみ ヒナを抱くハトのように
私は自分の空の巣の上に じっと座る

IV

人間が月と呼ぶ 白い炎を帯びた 4 5
あの球体の 乙女は
夜中のそよ風に散らかされた
私の羊毛のような床の上を
おぼろげに光りながらそっと動く
天使にだけ聞こえて 目に見えぬ 彼女の足音が 5 0
私の天蓋の 薄い屋根の織物を破いた所ではどこでも
星たちは彼女の背後から じつとのぞき見る
そこで私は 金色のミツバチの群れのように
星が渦巻き逃げるのを 見て笑う
そこで私は風で作った テントの裂け目を広げる 5 5
すると穏やかな小川や 湖 海が
まるで天上から私を通して落ちていく 空のかけらのように
月とかけらで 一つ一つ敷き詰められていく

V

私は太陽の玉座を 燃える帯でしばる
そして月の玉座は 真珠の帯でしばる 6 0
竜巻が私の旗を 広げる時
火山はかすみ 星たちは回転し泳ぐ
岬から岬へと 橋のような形をして
急流の 海の上へと
私は日光にも耐え 屋根のようにかかり 6 5

山々は その柱となる
ハリケーンや 火や雪を従え
凱旋門を通り 私は進軍する
空気の力が私の椅子に 鎖で繋がれると
何万もの色をした 弓 [虹] となる 7 0
湿った地球が下界で 笑っている間 その柔らかな色の
天体の火は上空で 間を縫うように進んでいた

VI

私は地と水の 娘で
空の 乳飲み子
私は大洋と 海岸の穴を通り 7 5
変化はするが 死ぬことはない
なぜなら天のテントが 汚れなく
剥き出しとなる 雨の後
そして風と日光が 凸レンズの輝きで
空気の青いドームを 建てるので 8 0
私は自分の記念碑を 静かに笑い
そして 雨の洞窟から
私は蘇り 再びそれを取り壊すからだ
まるで子宮から生れる子供や 墓から出る幽霊のように

[日付なし]

「ヒバリに寄せて」

I

ようこそ 陽気な霊よ！

汝は鳥などではない

なぜなら汝は汝の心を 天やその辺りから

全て注ぐから 前もって熟慮した訳でもない

技のおびたしい 大骨折りによって

5

II

高く もっと高く

大地から 汝は 飛び上がる

まるで炎の雲 火山の噴煙のように

青い深み [空] を 汝は飛ぶ

さえず 嘯りながら もっと高く舞い上り 上りながら常に嘯っている

10

III

沈んだ太陽の

黄金色の電光の中で

その上で雲が 明るく輝く

汝は空に漂い 走るように飛ぶ

その競争がいま始まったばかりの 肉体のない喜びのように

15

IV

淡い紫色の 夕暮れは

汝の飛翔の 周りで溶けていく
広い昼の 陽射しに浮ぶ
天の星の ように
汝は見えない がそれでも私には 汝の甲高い喜びの音が聞こえる 20

V

あの銀色に輝く 天体 [月] の
矢のごとき光線のように 鋭く
月の強い 明かりは
白い夜明けでも 明るく
やがて私達には見えなくなるが そこにある事は感じる 25

VI

汝の声に 大地と空気がすべて
大合唱 している
まるで 夜が帳をおろし
たった一つの 雲から
月がその光を雨と注ぐ 天がそれで溢れるように 30

VII

君の正体を 僕らは知らない
君は何に 似てるのか?
虹の雲からは これほど
明るく見える 雫は流れない
汝の存在から メロディーの雨を降らせるほど 35

VIII

まるで思想の光の 中に隠れて
命じられたわけでも ないのに
讃歌を歌う 詩人のように
やがて世界が 気にもとめなかった
希望や不安に 共鳴すべく 作られるまで 4 0

IX

まるで高貴な生れの 乙女が
宮殿の塔の中で
その愛に悩む魂を
人知れぬ時 夜中に
彼女の東屋 [心] に溢れる愛のように 甘美な音楽で宥めるように 4 5

X

まるで金色のホテルが
露の谷間に集まり
人の視界を遮る 草花の間で
その空気のような色を 隠しているように 5 0

XI

まるで自分の緑の 葉の中に
こんもりと覆われた バラの花が
暖かい風に 花を散らされ
やがて花が出していた芳香は

あの重い翼の盗人 [ハチ] たちを 余りの芳しさに気絶させるように

55

XII

キラキラ光る 草の上の

春雨の音は

草花を雨で 目覚めさせたが

常に楽しく明るく 新鮮だったもの全てを

汝の歌声は しのいでいる

60

XIII

教えてくれ 霊なのか鳥なのかを

どんな甘美な思想が 君のものなのかを

愛やワインを讃える

かくも神々しい 歓喜の洪水を

これほど喘ぎながら流出するのを 聞いた事がない

65

XIV

婚姻のコーラスか はたまた

凱旋の歌も

君のと比べたら すべて

空しいホラに すぎない

私たちはそこに何か欠乏が隠されていると 感じるようなものだ

70

XV

君の幸せな唄の 源は

どんなものなのか？

どんな野原 波 山なのか？

どんな姿した空や 平野なのか？

君自身の種類のどんな愛なのか？ どんな苦痛の無知なのか？

7 5

XVI

君の澄んだ鋭い歓喜の 声を聞いたら

倦怠など 存在しえない

苛立ちの影も

君のそばに 来たことはない

君は愛しているだけで 愛の哀しい豊満を知らなかつただけ

8 0

XVII

寝ても覚めても

君は 死というものが

僕ら死すべき人間が 夢見るものより

もっと真実で深淵なものと 考えるに違いない

さもなくば君の歌はどうして そのように澄んだ流れとして

流れる事ができたのか？

8 5

XVIII

僕らは過去や未来を見て

この世にないものに あこがれる

僕らの心からの笑いは
何らかの苦痛に 満ちているものだ
僕らの最も甘美な歌は 最も哀しい思想を物語るものだ 90

XIX

それでも僕らには 軽蔑する事はできる
憎悪や傲慢 不安や恐怖を
もし僕らが 涙を流さぬ
存在として 生れてるのなら
僕らがどうしたら君の喜びに近寄れるのか 僕にはわからない 95

XX

詩人に比べれば 君の技術は
喜びに満ちた音を 駆使して優れている
書物に見つける あらゆる宝物
などより 優れている
汝 大地を軽蔑するものよ! 100

XXI

君の脳が知っている に違いない
歓喜の半分でも 教えてくれ
そしたら 僕の唇からは 君のような
ハーモニーに満ちた狂気が あふれ出るだろう
そしたら世界は耳を傾けるだろう 僕がいま君の声を聞いているように 105

[日付なし]

「自由に寄せるオード」

まだ自由はない 汝の旗はちぎれ飛び
風に逆らう雷雨のように流れていく

パイロン

I

栄光ある人々は 再び国民の
雷光を発した 自由は
心から心 塔から塔へと スペインの上を
火を燃え移して 空にまで追い散らして
小さく輝いた 私の魂は その狼狽の鎖を鼻であしらった 5
そして崇高で強固な 歌の素早い翼を
身にまとった
まるで若いワシが 雲をつき抜け 高く昇り
詩の中でいつもの獲物の上に舞い上がるように
やがて名誉という天におけるその高位から 1 0
霊の竜巻がそれを包み 虚空の宇宙を敷き詰めている
生きている炎もつ最も遠くの天体の光は
その背後から 突進した
まるで声が海底から聞こえてくる時の 素早く沈む船の泡のように
私は 同じものを記録するつもりだ 1 5

II

太陽と この上なく静かな月が飛び出し生れた
深淵で燃える星たちは 天の深みへと
放り出された世界の大洋の中の島たる 複雑精巧な地球は

- 万物を維持する空気のできた 雲の中に浮ぶ 2 0
 が この最も神聖な宇宙は
 まだ混沌で 呪いだつた
- 汝が まだ存在しなかつたからだ しかし
 権力は最悪のものから もっと悪いものを作り
 獣の魂はそこで 生命をともされた 2 5
 そして鳥や水辺の 形あるものも
 それでその中で戦いが起き 絶望がその中に起き
 休戦も約定もないので 激怒した
 彼らの犯された乳母の胸は うめいた
 獣が獣を 蛆虫が蛆虫をめぐつて戦い
 人が人をめぐつて戦つたからだ 各人の心は嵐の地獄のようだつた 3 0

III

- 堂々とした姿した人類は 次に
 太陽の玉座のテントの下で その世代を増やした
 宮殿やピラミッド 神殿や牢獄は
 無数に増えた まるで山のオオカミに
 そのごつごつした洞窟が増えるように 3 5
 この人類という 多数の生き物は
 残忍で狡猾 盲目で図々しかつた
- 汝はそうではなかつたから しかし この孤独な多くの人類の上には
 暴君がかかつていた 不毛の波の上のポツンとした嵐の雲のように
 その下には 妹のペストと 奴隸の収奪者が 神のように君臨していた 4 0
 彼女の広い翼の影の中では
 黄金と血をむさぼる 専制君主や司祭たちが
 驚いた人類の群れを あらゆる方面から追立てた
 やがて彼らの最も奥にある魂が

血の汚れで染まるまで

4 5

IV

ギリシアの傾く高山の頂上や 青い島

雲のような山脈 砕ける波は

恩恵を与える天の大らかな微笑の中で 輝きながら日向ぼっこし

彼らの魔法にかかった 洞窟からは

予言に満ちたこだまが かすかなメロディーを出していた

5 0

何も案じない 荒地の上で

ブドウも穀物も 穏やかなオリーブも

人の利用にはまだ遭わず まだ勝手に生えていた

そして海の底で開いた 花のように

子供の頭の中にある 大人の暗い思想のように

5 5

あるべきものを包む 何かのように

技芸の 死ぬ事のない夢は

パロス島の大理石の多くの縞のように 隠されて横たわっていた

それでも言葉を知らない子供は 詩を口ずさんだ すると哲学は

エーゲ海の上で 汝のためにそのまぶたのない目を見張った

6 0

V

アテネの町が立ち上がった 王者に相応しい石造建築を馬鹿にするように

狭間胸壁の雲でできた紫色の崖や 銀色の塔から

幻が起きるようにできた都市だ 大洋の床が

その町の舗装で 夕空がそれを覆うテントで

その玄関には 雷の雲もつ風が住み

6 5

その頭は太陽の炎を飾った雲の翼の中に入っている

神々しい作品だ! アテネは更にもっと神々しく

まるでダイヤモンドの山の上のように
人の意志の上に 柱の冠をつけて輝いた 7 0
なぜなら汝がいたからだ そして汝の全てを創造する技術は
大理石に不滅に残された 永遠の死者と
汝の最古の玉座で 最近の宣託だった丘 [パルテノン] をあざけるは
形あるもので 一杯だったからだ 7 5

VI

時の流れる河の水面には そのシワだらけの似姿が映る
当時はそれは断固として 落ち着きなく横たわり
永遠に震えるが 消滅する事はない！
汝の吟唱詩人や 賢人は 8 0
過去の洞窟を通して 大地を目覚めさせる
突風と大きな音を立てて進む
宗教は彼女の目を覆い 圧制は怯えて縮み上がる
期待が飛ばない所を 飛ぶ
喜びや愛や驚異の 翼ある音は 8 5
空間や時のヴェールを バラバラに引き裂く！
一つの大洋は 雲も川も露も育てる
一つの太陽は天を照らす 一つの大きな霊は
命と愛で 混沌を絶えず新しくする
アテネが汝の喜びで 世界を新しくするように 9 0

VII

次にローマが来た そしてカドモス [竜退治してテーベを救う] の
バツケーから
オオカミの子のように 汝のこの上なく美しい深い胸から

彼女は偉大さのミルクを飲んだ もっともあの樂園の食物から
 汝の一番貴重なものはまだ乳離れしていなかったが
 そして恐ろしい公正な多くの行為は 9 5
 汝の優しい愛により差別された
 汝の微笑の中には 汝の側には
 聖人のようなカミーラ [女傑] が住み 断固たるアティリウスは死んでいた
 しかし涙が汝の貞潔な 純白の衣を汚すと
 黄金が汝のカピトリウムの 玉座を汚すと 1 0 0
 汝は愛の翼つけた軽やかさで 暴君たちの元老院を
 見捨てた 彼らはたった一人の暴君に平伏した 奴隷の身に落ちた
 パラティーノの丘はため息つき イオニアの歌をかすかにこだませた
 その調べを汝は聞くのが遅れ 縁を切ったのを嘆いた 1 0 5

VIII

どんなヒュルカニア [カスピ海南東岸の古代ペルシアの一地方] の峡谷や氷河の丘
 あるいは北極の大海原の 松の生えた岬
 あるいは近づきたい 最果ての小島からも
 汝は汝の王国の 崩壊を嘆いた 1 1 0
 森や波やその他の岩山 ナイアデスの氷のように冷たい泉一つ一つに
 哀しく苦しい こだまの言葉で
 人があえて学ばなかった あのこの上なく崇高な考えについて
 語るように教えながら なぜなら汝は赤カビ病の夢の
 魔法使いの群れも見守らなかったし ドルイド僧の眠りにも 1 1 5
 つきまとわなかったから
 涙の破壊された 錠から流れた涙が
 すぐに乾いたとしても何だ?なぜならガリラヤのヘビが
 殺し燃やすべき市の海から遣い出してきて 汝の世界を
 他との区別もできないほどの 山に作った時

汝はうめいたが 泣きはしなかったからだ 1 2 0

IX

大地は千年もの間叫んだ 汝はどこにいるのか？

それから汝の到来の影は サクソン人の

アルフレッド大王のオリーブの枝を巻いた額の上に落ちた

そして多数の戦士が集まっている砦は

平らな海底から炎を噴出する火山の岩山が 1 2 5

聖なるイタリアに誕生し

嵐の海の上に危険な早々を示したように

国王や僧侶や奴隷の 塔を頂く威厳のうちに

あの巨大な暴君は 怠慢な泡のように

人間の精神の一番深い所から 愛と畏れをもって 1 3 0

不思議なメロディーが 不協和の武器を黙らせた時

彼らの壁を一掃し その周りにどっと押し寄せた

そして死ぬ事のない芸術は 聖なる杖で

天の永遠のドームに 敷き詰められるに相応しいイメージを

私たちの地上の家の上に 見つけた 1 3 5

X

汝 月より脚の早い女の狩人よ！汝 この世のオオカミにとっての

恐怖よ！汝 光が東の空の穏やかな地域に分かれていく

雲を貫くように その太陽のような炎が嵐の翼つけた

過ちを刺し貫く 矢筒を持つものよ！ 1 4 0

ルターは汝の人を目覚めさせる目を捉えた

軽い雷光が その鉛のやりに反射した

それは神がかりの幻を溶かした その中では墓の中ののように

国民が横たわっていた

そして英国の預言者たちは 女王として汝を歓迎した 1 4 5
その音楽が永久に流れるに違いないが 消え去る事のない歌の中に
汝は悲しい光景から 目に見えぬわけでもなく
ミルトンの魂のささやきの 表情の前を通り過ぎた
彼は 落胆した様子で その夜の彼方を見ていたのだ 1 5 0

XI

熱心な時間と 不承不承でもない年月が
夜明けの光に 照らされない山の上に立って
彼らの声高の希望や不安を 踏みつけて黙らせ
彼らの群集で 互いを暗くし
自由をと 大声で叫んだ 憤りはその洞窟から 1 5 5
哀れみをと 答えた
死は 墓の中で青ざめ
そして荒廃は 破壊者に向かって助けてと吠えた！
天の太陽のように それ自身の神々しい光の蒸発気に
包まれて 汝は起き上がると 影のように 1 6 0
汝の敵を国から国へと追い回した まるで
昼が夢見る夜中に 西の波の上で空を引き裂いた
かのごとく 人々は 汝の見慣れぬ眼の
雷光のもとで うれしい驚きによるめきながら驚いた 1 6 5

XII

汝 大地の天よ！それなら 不吉な蝕に際して いかなる
呪いが 汝に棺衣をかける事ができようか？ 千年もの間
深い圧制の穴の泥砂から生まれ 汝の液体の光は全て

血と涙で染色され やがて汝の甘美な星たちは 170
 泣いて汚れを流す事ができるまで
 血のバッコス崇拜者たちのように フランス辺りでは
 どうして あのゾットするワインが
 破壊の王しゃくを持つ 奴隷や狂気の司教に任せられた子供たち
 として立ったのか！すると彼らに似ているがはるかに強い一人が 175
 汝自身の戸惑った権力の 専制君主が立ち上がった
 兵隊は 雲が雲と混じるように おぼろげに整列して混じり
 穏やかな天の聖なる東屋を 暗くした 彼は
 過去に追われて 死者たちと休む
 忘れられない時を除いた その幽霊は 彼らの先祖の棺の中では
 勝者の国王には 滅多になれない 180

XIII

英国はまだ眠っている 彼女は昔から呼ばれなかったのか？
 スペインは今や彼女を呼んでいる まるでヴェスヴィオ火山が
 そのゾットする轟音でエトナ山を目覚めさせるように そしてその
 冷たい雨の崖が その返事により真っ二つに裂かれるように
 明るくなった波に浮ぶエオリア諸島のどの島も 185
 ピテクサからペロルスまで
 遠吠えし飛びはね 声をそろえて反射する
 彼らは叫ぶ 私たちの上にかかる 汝ら 天のランプたちよ
 暗くなってくれと 彼女の鎖は金の糸で 彼女は
 微笑めばいい すると彼らは溶けていく しかしスペインのは
 鋼の結束で 美德の鋭いヤスリで 190
 氷礫土の小片をチリにまで溶かす
 一つの運命の双子よ！おぼろげな西空で私たちの前に
 君臨している永遠の年月に訴えよ 汝らが考えて成し遂げた全ての事を

封印から解き 私達に押印せよ！時はあえて隠す事はできないのだ 195

XIV

アルミニウス [17Cのゲルマン人の英雄] の墓よ！汝の遺体を明け渡せ やがて

灯台守から 軍旗をそうするように

彼の魂が 暴君の頂上に翻るまで

汝の勝利は 彼の墓碑銘となるだろう

真実の神秘のワインの 荒々しいパッコス of 信徒よ 200

国王に裏切られたドイツよ

彼の死んだ魂は 汝の上に生きている

私達はなぜ恐れたり希望を抱くのか？ 汝は既に自由だ！

そして汝はこの神聖かつ栄光ある世界の 失われた

楽園だ！汝 草花の茂る荒野よ！ 205

汝 永劫の島よ！汝は美をまとい 荒廢が

過去の汝の姿を崇拜する神殿よ！おおイタリアよ

汝の血を心臓に集めよ 獣の穴を

汝の聖なる宮殿にする獣たちを鎮圧せよ 210

XV

おお 自由なる者が国王という不敬な名前をチりに刻印するとは！

あるいはそこにそう書くと名誉の頁の上のこの汚点は

へビの道のようになり 軽い空気が消えてしまい

平らな砂が隠してしまう！

それでも予言はきいたのだ 215

勝利にきらめく剣を振りかざし

この忌わしいゴルディオスの言葉の へビのような結び目を断ち切れ

それ自体は切り株のように弱いが 結束すると

絶対に曲がらないように硬くなり 2 2 0
 人間を恐れさせる斧や杓となる事もできる
 その音には毒があり それは命を忌わしく
 腐敗させ 嫌われるものの精液なのだ
 汝の定められた期間に 汝の武装したかかとで
 この不承不承の蛆虫を 踏みつけるのを軽蔑しないで下さい 2 2 5

XVI

おお 賢人たちが その明るい心から薄暗い世界の
 ドームの中のランプに火をともしとは！すると「司祭」という
 青ざめた名前は そもそもそこから追放された
 地獄へと縮んで小さくなっていく
 これは不純な悪霊から生れた
 不敬な誇りという 食べ物だ 2 3 0
 やがて人間の思想だけが
 その恐れを知らぬ魂や 未知の力の
 審判の玉座の前で 一人一人ひざまづくのかもしれない！
 おお 思想をあいまいなものにしてしまう言葉は
 そこからそれらは生れるのだが まるで消えていく露の雲が 2 3 5
 白い湖から 天の青い肖像画を汚すように
 それらの薄い仮面や しかめ面や微笑や
 彼らのではない光輝を 剥ぎ取られた
 やがて真実と偽りが むき出しになると 彼らは
 一人一人自分の義務を受け取るべく 神の前に立つのだ 2 4 0

XVII

揺りかごと墓の間に 存在しうるいかなるものをも

P. B. シェリー 詩選 (2) (加藤芳子)

征服するようと 人に教えた者は
生命の王として 自ら王位についた おお 空しい努力よ！
もし彼が圧制と圧制者を 彼の高い意志の上に
自発的な奴隷として 王位につかせたのなら 2 4 5
もし大地が とてつもない多数の人に
要望に応じて服や食べ物を与える事ができるとしても 何だ？
そして思想上の力が種子の中の木のごようだとしても？
おお 熱心な仲裁者たる芸術が 炎の翼付け
自然の玉座に飛び込んだとしても 何だ？
その偉大な母 [大地] は彼女に愛撫せんとして身をかがめ
叫ぶ 汝の子孫よ あらゆる高所と深みに対する
支配力を 私に下さい もし生命が苦勞し
うめいている人々から 新しい欠乏や富を育てれるなら
汝の贈物や彼女のそれから 一人のために千倍ものものを強奪せよ 2 5 5

XVIII

来たれ だが人間の深い靈の最奥の洞窟から
明けの明星が イオニア海の波から
太陽を招くように 知恵を導け
私には聞こえる 彼女の車の翼が
炎の戦車に駆られる雲のように 自ら羽ばたく音が 2 6 0
彼女はやって来ない 汝らも来ないのか？
厳かな真実により 人生の全て指定された
運命を裁く永遠の思想の支配者たちとして
盲目の愛も平等な正義も 存在した過去の名誉も
未来の希望も 来ないのか？ 2 6 5
おお 自由よ！もし汝の名前がそのようなものでありうるのなら
汝はこういうものから解体され あるいは彼らが汝から解体されただろう

もし汝のものや彼らのものが血や涙によって買うべき宝物だったのなら
賢人や自由人は 涙や涙のような血を流さなかつたらうか？
厳かなハーモニーは

270

XIX

ここで止んだ そしてあの力強く歌う霊は
いきなりその深淵へと 引きずりこまれた
すると野生の白鳥が 夜明けの翼の罫の中を
横切つて 荘厳に空を飛び
空気の金色の光の中を ゴロゴロいってる平野の上に 275
真っ逆様に落ちていくように
その時 雷光は彼の頭を貫通していた
夏の雲が 雨の橋を解かれて消えていくように
か細くなったロウソクが 夜が消滅するにつれて消えるように
短命の昆虫が 夕方になると死ぬように 280
私の歌は その翼が力を解かれたので
消沈してしまった その上で その飛翔を
維持していた大きな声のこだまは はるか遠くで消えてしまった
まるで水の路をさっきまで敷き詰めていた海の波が
嵐のような遊びの中で溺死者の頭の周りでシューッと言うように 285

[年号なし]

[削除された詩行]

人の足跡のない 魂の洞窟の中には
一つの姿が 君臨している とても情熱的に美しいので
その近くをさまよう 冒険好きな思想は ひざまづき震え

その存在の光輝を身にまとい すると光は
彼らの夢のような形を貫き やがて彼らは火の力で充満するに至る

【恐らく「自由に寄せるオード」に関する 別の詩行】

私達のこの世の暗闇の上に昇るべき この上なく明るい太陽の
まだ昇っていない光輝は もし今 汝の霧の中の玉座から
汝を招いているあの星が 汝の若い明るさと
朦朧もうろうとした戦いを行なう雲を 溶かす事ができるといいのだが！

[日付なし]

「オード」

【製作1819年10月。スペイン人が自由を取り戻す前に】

立ち上がれ 立ち上がれ 立ち上がれ！
この世には 汝らにパンを拒む血がある
君たちの傷が 死者たちのために泣く
目のようであれ 死者のため 死者のため
ただ支払うべきなのは どんな他の悲しみだったのか？
それは君たちの息子であり 妻や兄弟であった
彼らが闘いの日に 殺されたなどと誰が言ったのか？

5

目覚めよ 目覚めよ 目覚めよ！
奴隷と暴君は 双子に生れた敵だ
君たちの親族が 永眠する所で 永眠するチりに
冷たい鎖が放棄されるように
墓の中の彼らの骨は 驚いて動くだろう

10

彼らが天上での聖なる闘いでの最高に声高な
彼らの愛する者たちの声を聞いたなら

旗を高く振れ 高く振れ！

1 5

自由が馬に乗って 征服に通るかかるから

自由をあおる奴隷たちは

飢餓で苦勞で ため息の代償に ため息を払うのだ

そして自由の皇后の馬車にかしづく汝らよ

団結した戦争の最中に両手をあげず

2 0

自由を守れ 汝らはその子供なのだから

栄光 栄光 栄光あれ

大いに苦しみ亡くなった人々に！

汝らを得るだろうもの以上に 偉大な名誉が

語られる事はなかった

2 5

征服者は その敵だけを征服してきた

彼らの復讐や傲慢や権力を 彼らは破壊してきた

汝らよ 君たち自身の上に もっと意気揚々とまたがって進め

額を 額を 額を飾れ

スマイレヤツタやマツの花で

さあ 血のしみを隠せ

3 0

甘美な自然が 神聖にしてくれた色で

緑色の力 紺碧の希望と永劫によって

しかしパンジーをその中に入れてはいけない

汝らは傷ついたのでし それは思い出を表わすのだから

3 5

[1819年10月 タイトルにより]

[削除された連]

集まれ おお 集まれ
愛と平和における敵も味方も！
波は一緒に眠る
戦闘開始を告げるラッパがやむ
なぜなら大人しくなった 牙をなくした権力が
自由の大胆不敵な子供と 遊んでいるからだ—
ハトとヘビが 和解したのだ！

[1819年10月]